

芥川龍之介：「鼻」

□芥川龍之介の「鼻」という小説は、五～六寸(約15～18センチ：一寸は約3センチ)の「鼻」をもつ内供(えらい僧侶)のお話です。

□もし私の鼻がそんな大きさの「鼻」だったら、だと思えます。

□作者の芥川龍之介については、
という印象がありました。/あまり詳しくありませんでした。/○○○○○○くらいしか知りませんでした。

□この小説の内供の、のなところが
共感できました。/好きになりました。/○○○○さんみたいだと思いました。/なるほどなと思いました。

□でも、なところが
好きになれません。/理解できません。/友達にはなれないと思いました。

□弟子の僧が鼻を治す方法を探し出してきました。そのときも、という態度でした。
私は 信じられない / イヤなやつらだな / 感謝すればいいのに / えらそうな態度だな と思いました。

もし私なら、するのになと思いました。

□鼻を治す様子が詳しく書かれていて、だと思いました。

もし私が弟子の僧で、鼻をするとしたら、
気持ち悪い / おもしろい / カいっばい・思いっきり・日頃のお返しにぎゅうぎゅうとやってやろう! と思いました。

□普通の鼻になった内供の様子はだと思いました。
ずっとなりたと思っていた普通の鼻なのに、だと思いました。/と感じました。

□結局、内供の鼻はもとに戻ってしまいました。私は、だと
思いました。/感じました。でも、内供は鼻の治し方を知っているのです、もう一度治すこともできます。

でも、もう治さない / 治すのにためらう / あきらめる と思います。
なぜなら、だからです。

□内供は鼻についてあれこれ言われること / 陰口を言われる / 笑われる ことよりも、
の方がイヤ / キライ / むかつく / きずつく のだと思います。

私がもし内供なら、だと思いました。

□この小説を読んで、自分のコンプレックス / 人と違う点は、
と考える / 受け入れる / 克服する ようになりました。